

シリーズ

“キラリ企業”

の現場から 第54回

公社のさまざまな支援サービスをご利用いただいている元気企業を紹介する“キラリ企業”の現場から。第54回目は、金属及びプラスチック製品の試作、量産設計、製作及び販売を手がけ、自社ブランドの商品化に着々と取り組む株式会社菊池製作所（八王子市美山町）をご紹介します。同社は知財戦略導入支援事業（ニッチトップ育成支援）※、産産連携マッチング交流会や販路開拓支援事業を活用されています。

信頼してくださるお客様のために、 熱意を持って応える「ものづくり」

株式会社菊池製作所

郷土を愛し、社員を愛す

株式会社菊池製作所の敷地内各所には「社長の三つの思い」が掲示してある。「三つの思い」とは「①良い環境で働ける会社、②将来も夢をもって働ける会社、③社員の生活向上が図られる会社」で、訓示の類ではない。創業に当たり菊池社長がこれまでの社会人経験を踏まえてまとめた、会社の理想像である。一言で言うなら、会社は社員を大事にすべきということであり、そのことを社員にも理解してもらうために社内に掲示している。同社はこの思いを実現するため様々な取組を行っているが、その一つが社員の資格取得に対する積極的な支援である。製造業を営む同社は、CAD利用技術者試験やQC検定などの技術・生産管理に関するものはもちろん、簿記、TOEICやビジネス実務法務検定（東京商工会議所®）といった幅広い資格・検定の取得を支援しているところである。



菊池製作所外観

同社は昭和45年に創業し、平成22年で40周年を迎えた。創業時は菊池社長を含む5名で板金加工等を営んでいたが、徐々に事業を拡大。昭和59年には本社以外の最初の拠点として、菊池社長の故郷である福島県相馬郡飯館村に福島第一工場を開設するに至った。これは、故郷の発展に貢献したいとの社長の思いからであり、現在、飯館村における生産拠点は6工場にまで拡大しているほか、同村出身の社員が同社の中核人

材として活躍しているところである。郷土を愛し、社員を愛す。株式会社菊池製作所は同社を支える者たちへの愛に満ちている。

徹底した顧客指向が自らの成長を促す

同社は「一括・一貫体制」をスローガンとして、高い技術と優れた設備を基盤に、開発・試作から量産に至るすべての工程について、顧客の様々な要望に対応できる質の高い顧客支援体制を確立している。例えば携帯電話やデジタルカメラの筐体などのように、材質の異なる金属と樹脂を複合的に組み合わせた部品を試作する場合も、同社は高精度の試作品をワンストップかつ短期間で納品することが可能である。また、試作用の金型を改良し、安定的で質の高い量産体制への移行支援を行うこともお手の物である。

これら総合的・専門的な対応力の背景には、他社に先駆けた高性能設備の導入や、加工技能を極めるための社員の努力の積み重ねがある。また、その根底には、事業の集中と選択を安易に行うのではなく、同社を信頼する顧客の要望にはすべて応えるという哲学がある。例え困難な案件であっても、これまで培った技術力、ノウハウと企画提案力をフルに発揮し、期待以上の成果を出すことで同社は成長してきた。



レスキューロボ

こうした姿勢が信頼性を高め、他社との共同開発にも発展している。例えば、システム系企業との連携による製品で、消防庁への納入実績のある小型レスキューロボット。また、東京工科大学との連携の成果物であるパイプベンダーは三次元加工を6軸で行うことにより、これまで困難とされた曲げ、らせん、ねじりの連続加工を1工程で実現した。これら社外との連携は、単に一製品の開発だけを目的とするものではなく、今後の同社の発展にも必要であると菊池社長は考える。



パイプベンダー

知財を活用しブランド確立を図る

国内市場が縮小傾向にあり、グローバルな市場競争がさらに激化すると見込まれるなか、同社は高付加価値の製品・サービスにより事業を拡大するビジョンを描き、自社ブランドの確立に向けて取り組んでいる。平成18年にはその布石として、オンリーワン製品を研究開発するための拠点である「ものづくりメカトロ研究所」を本社内に開設した。将来を十分に見通した経営戦略を練っていた同社だが、最近一つの重要な事に気付く。それは製造業の経営戦略として不可欠な、特許などの知財戦略がなかったということである。

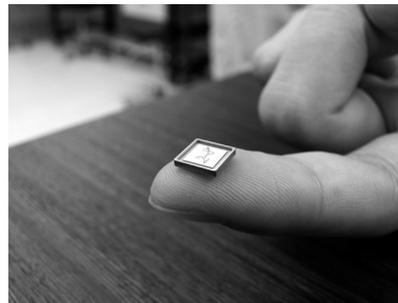
一般の中小企業においては、特許や商標などの知的財産は費用がかかるうえ管理が面倒とのイメージがあり、同社も例外ではなかった。しかし、今後新製品・新技術の開発を推進するのであれば、まずは他社が開発していない技術領域を見つけ出すことが不可欠である。他社の特許権を知らずに事業化し、訴えられた場合、これまで培った顧客からの信頼が水の泡となる。また、オンリーワンの技術の開発に成功した場合、その技術の特許権、時にはネーミングなどの商標権を取得し、しっかりとガードしたうえでブランド構築を図る必要がある。さらに、新興国の企業との競争が激しくなるなか、自社のブランド製品を模倣被害から守り、万全な形で国内及び海外事業を展開するには、侵害行為に対する備えを用意しなければならない。こうした理由で、知財戦略を策定することは同社の最重要課題となり、知的財産総合センターの門を叩くことになった。

知的財産アドバイザーによるヒアリングで同社の知的財産管理について改めて点検したところ、次の二つの問題を抱えていた。まず、①平成21年6月に知的財産に関する社内規定が施行されたものの、特許出願すべき発明について優先順位をつけられず、また、先行技術（既に他社

が取得した特許権）に関する調査もなされておらず、効率的な出願が行われていないこと。②経営戦略の一環としての知財戦略が策定されておらず、知財戦略を推進する体制が構築されていないこと。こうした知財管理体制の不備は既に撤退した事業に関する特許へ高額の維持費用を支払い続けていたことなどに現われていた。このため、平成22年度より知的財産総合センターの「知財戦略導入支援事業（ニッチトップ育成支援）」を利用することとし、専門のアドバイザーによる継続的支援を受けながら、課題の解決に向けて着実な取組を開始したところである。

将来を見据えて

今後の事業戦略は大きく二つ。一つは板金加工など従来の主要事業5分野のさらなる技術精度の向上、もう一つは蓄積したノウハウを活用し、医療や環境分野などへ展開することである。例えば、ドイツで開発されたマイクロマシンを活用し、小型の流量センサーによる家庭用燃料電池や、小型ポンプ内臓の医療用輸液ポンプを構想し



メタルマイクロポンプ

ているとのこと。また、これら新製品は、特許権や商標権を取得するなど知財戦略を駆使してブランド製品化したいとのことである。菊池社長の熱い思いは社員

へも伝わり、やがてクラフトマンシップに満ち溢れた製品となって顧客へ届けられるであろう。同社は高尾山の麓で、冬には厳しい寒さとなる地域にあるが、四季を問わず変わらない社員1人1人の熱い思いにより一層の発展がもたらされることを願ってやまない。

（東京都知的財産総合センター 福永篤志）

※知財戦略導入支援事業（ニッチトップ育成支援）：知的財産戦略を導入し経営基盤の強化を図る企業を対象に、知財センターのアドバイザーが最大3年間の継続的な相談・指導を行い、専門人材の育成や社内体制の整備など実践的支援を行う。

企業名：株式会社菊池製作所

代表取締役：菊池 功

資本金：17,000万円 従業員数：429名

本社所在地：東京都八王子市美山町 2161-21

TEL：042-651-6063

FAX：042-651-7890

URL：http://www.kikuchiseisakusho.co.jp/